

＜報 告＞

佛光山台北道場再訪記

武 田 龍

1. はじめに

筆者は、2008年7月16日、中華民国台北市信義区松隆路にある佛光山台北道場を訪問した。この道場には、2006年9月25日に訪問しており、今回は2度目となる。前回は、同朋大学佛教文化研究所アジア仏教研究会の研究活動の一環として、台湾仏教の現状を視察し交流することを目的とするものであった。その成果はすでに発表してある⁽¹⁾。

2年が経過してみると、少しずつではあるが、いくつかの変化も見られる。身辺雑記のような細々とした事柄も含めて、台北道場の現況を報告することは、佛光山の活動の現状を把握するとともに、台湾仏教の現在を記録することになると考える。これらの集積が、やがては台湾仏教の大きな理解へと至ることを期するものである。

2. 台北道場周辺

台北市は、260万人超の人口を抱える台湾最大の都市であり、中華民国の首都である。台湾経済の好調を反映し、市内には高層ビルが林立する。鉄道・地下鉄・バスなど各種の公共交通機関が整備され、また市民が愛用するオートバイは夥しい数であり、市内の道路にはバイクの波が絶えることがない。高速道路や自動車専用高架道路が要所に建設され、鉄道は地下式と高架式が導入され、地上路線を減らして地上交通の混雑緩和を図っている。都市基盤はよく整備されており、活気の溢れたエネルギッシュな大都会である。

佛光山台北道場は、台湾鉄道松山駅のすぐ隣にあり、駅舎とは狭い路地を

挟むだけで、真横に位置する。2年前の訪問は夕方のもので、周囲の様子まではよくわからなかった。今回は朝9時という時間帯である。松山駅周辺は、ビジネス街という雰囲気ではなく、繁華街であるとしても、若者のエネルギーの凝縮された西門町のような雰囲気でもない。生活重視という感じの落ち着いた街並みという印象を受けた。

3. 人間^{にんげん}仏教と佛光山

佛光山は、中国仏教の臨済宗の法脈に属し、現代の台湾において人間仏教を実践する著名な仏教団体の1つである。人間仏教とは、仏教を現代社会に合わせて解釈する考え方で、仏教の教義をより一層現実の生活に即して理解し実践するものである。

ここでいう人間とは、「人世間^{にんせけん}」のことで、「人の世」「この世」「人の住むこの世」をいう。人や人類のことではなく、人物や人柄・人格のことでもない。この人間という語は、もともと「人と人との間柄」を意味する言葉であるが、現代の日本語では第一義が人界に住むもの、人、人類の意味のほうで、本来の意味は痩せ衰えて、第二義となったようである。漢音読み「じんかん」という言葉が伝える意味のほうへとその内容が移行したのかもしれない。人間とは、そのような言葉である。しかし、まだ古語の部類に入るわけではない。日本仏教においても、同様の意味で使用されている。その身近な具体例として、戦国期の乱世を見据えて仏法を説いた蓮如の言葉がある。

人間は不定のさかいなり。極楽は常住の国なり。されば不定の人間にあらんよりも、常住の極楽をねがうべきものなり。……それ人間に流布してみなひとのころえたとおりは、なにの分別もなく、口にただ称名ばかりをとねえたらば、極楽に往生すべきようにおもえり。それはおおきにおぼつかなき次第なり。(蓮如『御文』五帖目十一通)

それ、人間の浮生なる相をつらつら観ずるに、おおよそはかなきものは、この世の始中終、まぼろしのごとくなる一期なり。(蓮如『御文』五帖目十六通)

と説かれる「人間」は人世間のことである。

人間仏教は、清朝末期から民国初期の混乱期に、太虚法師が提唱した中国仏教の改革運動の中から生まれた理念にもとづくとされる。

人間仏教を明快に提唱したのは、学僧として名高い印順法師であった。戦後の1951年、イギリス・日本をはじめとする外国の諸勢力に長年にわたり侵略蹂躪されて荒廃した国土、疲弊した社会の中で、印順法師は各分野における仏教徒の活動を鼓舞し、世俗社会での活動を奨励した。戒厳令下であったにもかかわらず、政治・農業・工業・商業・学問など各分野で集団を作り、工会・農会・商会・仏教会を組織するように勧め、言論と出版の自由・教育の平等・経済の平等を図り、政府に反対する野党にも選挙経費を提供するようにと主張する大胆なものであったという⁽²⁾。印順法師の没後、従来の仏教の在り方に反省を求める声が社会の各層から高まり、その結果、多くの仏教団体が人間仏教を実践するようになった。人間仏教は、現代の台湾では最も影響力のある理念とされる。

人間仏教とは、個人の能力開発や個性伸長や人間形成をいうものではなく、また人間復興や人間賛歌や「人間的に生きる」ことを教える仏教を意味するわけでもない。人世間である現代社会の実情に添い、出家主義を貫きながら世俗の生活に積極的に関わる仏教ということである。

佛光山は、禅淨双修の修道の立場を採り、僧侶は座禅と念仏を両方とも取り入れた修行生活を送る。戒律を重視し出家の意義を強調するが、僧侶は世俗を離れて座禅三昧や念仏三昧の修行に明け暮れるわけではない。出家本来の目的の達成に専念するのであるが、テーラワーダ（上座仏教）とはその方法が違うのである。出家した僧侶は、世俗から離れ自身の開悟成仏のみを求めて自分の修行にだけ取り組むのではない。それとは逆に、佛光山の僧侶は、世俗に入り世俗に関わる生活を送っている。

佛光山は、自分の開悟成道を求めて深山幽谷に籠る森林僧（林住比丘，*ārañṇaka*）の道を採らない。出家者はこの世の衆生とともにある、と考えるところに人間仏教は顕現する。菩提を求める自分の修道生活が、五濁の世に

苦しむ衆生の利益となるような生活を送ろうと志す。自利利他円満の道を発願する。まさに人間仏教の実践である。そのため、出家生活は、自分の悟りを求める自利であると同時に、利他行の実践そのものと規定され、教育・慈善・福祉・養育・能力開発・啓発・矯正・治療・共感・慰安などさまざまな局面をもつことになる。それゆえに佛光山が経営する事業体は多種に及ぶ。

台北道場は、佛光山の拠点施設である。松山駅に隣接する交通至便の立地と14階建ての大規模な近代的ビルに入居するという条件は、この道場の性格と役割を人間仏教の実践という観点から考えるうえで重要である。このビルの1階から3階と5階の半分を除くスペースに、佛光山関係の13の団体や事業体が入居しており、道場はそれらと一体となった活動を展開する総合的施設であり、その総称なのである。

今回は、依昱法師の仲介により妙月法師（尼僧）の案内を得て視察した。流通処（応接室）で面会し、各所を見学し説明を受けた。この道場に在籍する僧侶は60名という。一々のお名前は記さないが、ご配慮をいただいた台北道場関係者の皆様にお礼を申し上げる。

4. 佛光山台北道場

ビルの最上階の14階には、如来殿、寺務処、詢問室、服務台、流通処がある。本堂にあたる如来殿は、千人を収容できるという巨大な空間で、正面には五方仏が安置されている。（中央）毘盧遮那仏（Vairocana）、（東方）阿閼仏（Akṣobhya）、（南方）宝生仏（Ratnasambhava）、（西方）阿弥陀仏（Amitāyus）、（北方）不空成就仏（Amoghasiddhi）である。この五方仏の両脇には、右壁に文殊菩薩（Mañjuśrī）の壁画、左壁に普賢菩薩（Samantabhadra）の壁画が描かれ、さらにその両脇には右側の観音殿に観音菩薩（Avalokiteśvara）、左側の地蔵殿に地蔵菩薩（Kṣitigarbha）が奉安されている。「現世では観音を頼み、臨終では地蔵にすがる」と言われるように、菩薩の中でも特に観音と地蔵の二菩薩が重要視されている。

前回の訪問時には、この如来殿において翌日に信者の結婚式が行われると

いうことで、おめでたい結婚式のために、色鮮やかな盛花が溢れんばかりの飾り付けが施され華麗な荘厳がなされていた。仏化婚礼（仏前結婚式）という形で人生の重要な節目の儀式を本堂の仏前で行うことは、出家教団の空間に世俗の通過儀礼を取り込み、新しい意味付けを与えたわけで、人間仏教の1つの表れと見ることができる。

臨済宗に属する佛光山には座禅を行うための禅堂がある。12階の禅堂を初めて見学した。ここは、出家した僧侶の座禅修行のためというよりは、在家者のための施設とされる。在家者の短期集中座禅会が7日間の日程で行われる。仏七といわれる。

禅堂の中には、右側に20人、左側に20人と2列が向い合せに設けられ、計40人分の僧房がこしらえてある。在家者のための座禅会では、座禅（50分間）と経行（^{きんぎん}15分間）とを繰り返す。日中には軽い運動が30分間行われ、太極拳のような体操をする。食事は運ばれて各自の席の前に置かれる。禅堂の入り口の外側には看板が立てられ、「止静」（座禅中）、「放参」（なにもしていない）という表示が掲げられて、外の通路を通る人に注意を促している。

台北道場では、経典講座が開催され、法師が経典を講ずる。2008年7月16日には慧昭法師が六祖壇経を、9月3日から7日までは心定和尚が金剛経を、9月17日には永餘法師が慈悲三昧水懺を講ずることになっていた。

台北道場の法要などの活動については、道場発行の「貳零零捌、柒月一玖月行事曆」によって知ることができる。

[7月]

3日10時から報恩法会

5日7時半から八関斎戒

17日10時から光明灯法会

21日は観世音菩薩の出家記念日にあたり、9時半より12時半まで大悲懺法会が勤められる

毎週金曜日19時20分から金剛経法会（4、11、18、25日）

毎週土曜日 19時半から念仏共修（5, 12, 19, 26日）

第1日曜日 9時半より華嚴法会（6日）

[8 月]

毎朝 6時から7時までの早課勤行は、地蔵經を読誦する（1日～30日）

29日は地蔵菩薩の誕生日にあたり、10時から地蔵法会が勤められる

1日～10日と13日～17日には、毎日14時から19時まで孝親報恩の瑜伽
燄口法会が勤められる

15日10時から光明灯法会

29日(金)19時20分から金剛經法会

30日は供僧道糧総回向

31日10時から報恩法会

毎週土曜日 19時半から念仏共修（2, 9, 16日）

第1日曜日 9時半より華嚴法会（3日）

[9 月]

6日7時半から八関齋戒

14日10時から光明灯法会

29日10時から報恩法会

毎週金曜日 19時20分から金剛經法会（5, 12, 19, 26日）

毎週土曜日 19時半から念仏共修（6, 13, 20, 27日）

第1日曜日 9時半より華嚴法会（7日）

これを見て気づくのは、8月（旧暦7月）は地蔵菩薩の聖誕月にあたるため、早課は地蔵經の読誦となり、旧暦7月1日～10日、13日～17日には連日、瑜伽燄口⁽³⁾法会が勤められることである。

八関齋戒は、伝統仏教の儀制を実践するもので、在家の仏弟子が僧団生活を体験し修身進徳するための行事である。如来殿において夜9時まで行われ

る。

大悲懺法会は、観音菩薩の徳を讃えるもので、

観音菩薩妙難酬	清浄莊嚴累劫修
三十二応遍塵刹	百千萬劫化閻浮
瓶中甘露常遍灑	手内楊枝不計秋
千處祈求千處応	苦海常作度人舟

と謳われる。

また、旧暦で毎月15日には光明灯法会が勤められる。7月17日（旧暦6月15日）、8月15日（旧暦7月15日）、9月14日（旧暦8月15日）である。これは仏前に点灯して功德を得る法会である。その功德とは、①美貌相好 ②弁才増上 ③信心増上 ④修行増上 ⑤道德増上 ⑥眷属和合美満増上 ⑦看清目標、照亮前途、果照菩提 ⑧出生人間、可生富貴家、そして生天、可増品増位を得るとする。人間界に出生してしかも富貴の家に生まれることができるという功德が謳われ、天に生まれることが適うとされる。極楽も浄土も出てこない。

さらに、新月の日にあたる旧暦の朔日（1日）つまり旧暦の月始めには、報恩法会が勤められる。7月3日（旧暦6月1日）、8月1日（旧暦7月1日）、8月31日（旧暦8月1日）、9月29日（旧暦9月1日）。

このように見てくると、毎週金曜日の金剛経法会、土曜日の念仏共修、第1日曜日の華嚴法会のように、曜日で設定された法要と、旧暦1日の報恩法会、旧暦15日の光明灯法会のように旧暦の1日、15日の法要との2種があることがわかる。曜日設定のものは現代社会の市民スケジュールに対応した設定であるといえる。旧暦1日、15日は布薩の日程を踏襲したもののようで、釈尊以来の仏教の伝統を継承していると考えられる。

5. 佛光山の団体・事業体

国際佛光会中華總會（13階）は、国際佛光会の本部である。世界中に広く展開している佛光山の活動を統括する業務を行う。38人の職員（僧侶は

15人、在家者は23人）を擁し、主任は妙月法師が務める。

社教館（11階）では、各種の文化教養講座が市民向けに開設されている。活動時間は、早い講座は日曜日8時半からの一日禅修、水・金曜日9時15分からの松鶴学苑、火曜日の仏画芸術・木曜日の書法芸術は9時半に始まり、月・土曜日は10時に始まる。おおむね午前の部・午後の部・夕方の部・夜の部という区分で講座が設定されている。特に19時以降の夜の講座は開設数も多く充実している。終了時間は遅いもので22時となっている。夜は勤めを終えたサラリーマンや学生が通って来るといふ。土曜日は講座数が多い。開講時間の順に紹介する。

月曜日 古箏琴芸、素食烹飪、棉紙撕画、日本舞踊、自在ヨーガ、揚琴、鋼琴、日本語会話、仏像芸術

火曜日 仏画芸術、ハタ・ヨーガ、養生ヨーガ、仏学導読、二胡琴芸、敦煌舞蹈、生活美学

水曜日 松鶴学苑、鋼琴、仏学導読、識字読経、基礎禅修、団康領導、進階禅修、台北道場青年箏楽団

木曜日 書法芸術、識字読経、串珠芸術、喜悅ヨーガ、抄経許願、經典導読（維摩詰經）

金曜日 松鶴学苑、抄経許願、法音清流、整合ヨーガ、經典導読（雜阿含經）、敦煌舞蹈、幼兒律動

土曜日 供花研修、日本語会話、身心芸術ヨーガ、古箏琴芸、兒童古箏、中国書法、假日仏学書院、基礎禅修、文采飛揚、兒童古箏、基礎禅修、古箏琴芸、善童学園、基礎禅修

日曜日 一日禅修、台北佛光童軍団（毎月第2、4週）、台北道場青少年箏楽団、青少年古箏、古箏琴芸、兒童禅茶（毎月第2、4週）

このように楽器演奏、音楽、書、絵画、舞踊、体操、ヨーガ、外国語会話、生け花、料理、仏学、禅修という多数の講座が開設されており、1週間に千人ほどの参加者があるという。芸能、芸術、健康、教養などの講座の中に、仏教の經典理解や座禅研鑽の講座が開設されており、法師たちが講師を

務めて、仏教への導入路の役割をはたしている。

佛光縁美術館（10階）は、佛光山が収蔵する美術品文物の展覧や芸術家の個展、信者の作品展などを開催する。筆者が訪れた時は、「沈香の美」展を開催中で、高価な香木である沈香の塊を彫刻した作品が多数展示されていた。筆者が普段見慣れているものは、沈香といっても「刻み沈香」という細かく刻まれて粉末にされたものが多く、彫刻の素材となるような大きさのものをみるのは初めてのことであった。

香海文化（9階）は、佛光山の文物を刊行する出版社である。特筆すべきは、ここは10ヶ国語の翻訳チームを持つことである。佛光山は、教育を重視していることで知られるが、特に若年者への外国語教育に力を注いでおり、全山挙げて外国語の修得に取り組んでいる。英語、日本語、韓国語などを修得したお坊さんたちはそれぞれ修得した言語の国に設立された佛光山の分院・支院へ配属されて教化活動にあたっている。佛光山の分院・支院は、世界各国各地に驚くほど多く開設されている。在留中国人・華僑ばかりでなく現地住民と連帯して布教活動が展開されており、それぞれの地域の言語で伝道が行われているのである。佛光山の情報の発信力と即応性には、目を瞠るものがある。

国際社会の多言語の状況に柔軟に対応する試みは既に始まっており、その成果も現れている。説教集や講義録など佛光山の日本語の出版物は数多い。国際性というか、開国の気風というか、中華意識に基づく束縛は希薄なようである。これは仏教の持つ普遍性の一つの表れでもあろう。日本仏教は、宗派意識が壁となり、他宗派をはじめ外の世界との対話ができないのが現状である。内向きの会話にとどまる。日本仏教の教えは日本語でしか語れない、というような頑迷な思い込みが通用する鎖国の時代はとうに終わった。日本の仏教教団は仏教の普遍性をどのように打ち出せばよいのか。喫緊に取り組むべき課題である。

翻訳の拠点は、台湾の台北と高雄、アメリカの西来大学（佛光山設立）の

3ヶ所に置かれている。案内と説明をしてくれた慧耕法師（23歳）はウェブサイトの仕事に従事しており、5人ほどで担当していると話してくれた。

如是我聞（9階）は、佛光山の常用する仏教梵唄や声明や讃歌をCDやDVDなどに作成して発行している。社員は3人で、そのうち1人は僧である。発行専員の呉其淳さんが丁寧に説明してくれた。

人間福報（5階）は、発行部数20万部以上の日刊紙である。社長の妙開法師の案内で見学した。社員は80人で、編集には40人が携わる。そのうちの15人が僧侶である。『人間福報』紙の編集方針は、「集体創作」とされる。記事は記者が書くだけでなく、佛光人（佛光山に集う僧俗の人々。佛光山で仏教の教えを受けている同信の人々のこと）の1人1人が身近なところの記事を持ち寄り作成されるということである。土曜日と日曜日の紙面は、休日にふさわしく、穏やかな雰囲気になるように構成するそうである。

6. 僧侶の生活

佛光山の僧侶は毎日どのような生活を送っているのでしょうか。M法師に尋ねてみた。毎日の日課は以下のようである。

5 : 30	起床
6 : 00～6 : 40	早課
7 : 00～	朝食・清掃
8 : 30～11 : 00	仕事
11 : 00～11 : 30	午課
11 : 30～12 : 30	昼食
12 : 30～17 : 00	仕事
17 : 00～17 : 40	晚課
18 : 00～19 : 00	薬事（薬石）
19 : 00～	仕事
22 : 30～23 : 00	座禅（普通の比丘尼の場合）
25 : 00～25 : 30	M法師の座禅の時間

法師は、「勤務時間は朝 8 時半から夜 25 時までです」と苦笑する。「随分と超過勤務ですね」と驚くと、「仕事の都合上どうしても夜は遅くなります」と言う。就寝前の座禅（瞑想）は、精神を安定させるので安眠に入り易いと話してくれた。

禅門では作務という自給自足のための共同作業が修行の一つとして行われているが、これは言わば自利の立場での行為である。佛光山ではもっと積極的である。事業体といっても営利を主たる目的とするわけではない。佛光山の教えに、「一日不做，一日不食」（一日なさざれば，一日食べず）とあり、仕事も修行という考え方にに基づき、その精神に添った生活がなされる。仕事とは、作務ではなく、大衆を仏法に引き入れる工作⁽⁴⁾であり、弘法活動である。すなわち僧侶にとって仕事は利他行と位置付けられる。

別の法師に、失礼を顧みず、思い切って仕事の俸給について尋ねてみた。まことに訊きにくいことを訊いたわけであるが、答えにくいことを率直に答えてくれた。ある事業体では、月給として、在家者の社員は 2 万圓以上、僧侶の社員は 450～600 圓、社長（僧侶）は 490 圓いただいているということである。2008 年 7 月現在、1 圓は 3 円 60 銭前後であった。台湾社会における金額の多寡を考えるか、それとも出家者の金銭の受領を考えるか、あるいは僧俗間の金額の比較を考えるか、いまだどう受け止めてよいか困惑の中にある。台湾仏教の新しい局面を 1 つ知った思いがした。

7. 佛光山の戒名（法名）

佛光山の僧侶は、出家受戒の時に師匠から受けた戒名（法名）を名のる。戒名は漢字 2 文字である。これまでのところ、尼僧には、出家の時期により順に慈・依・永・満・覺・妙・如・有の字が使われており、名前を聞くと出家の時期が大体わかる。男僧には慧・心の字が使われている。

佛光山の僧侶は、臨済宗の僧侶であるため、臨済宗の戒名も持つ。臨済宗の戒名には、「心」の字がつくという。佛光山の歴代和尚は臨済宗の僧籍が表に出るため、心平和尚、心培和尚、心定和尚と名のる。妙月法師は心庵、

妙開法師は心樺であった。

このように、佛光山の僧侶は、佛光山名、臨濟宗名、俗名の3つの名を持つことを知った。

注

- (1) 武田 龍「台湾仏教の現状」(『同朋大学佛教文化研究所紀要』第26号, 2007)

同 「台湾仏教の輝き」上・下(『春秋』No. 491, 492. 春秋社, 2007)

同(依昱訳)「台湾佛教之光」(『普門學報』第44期, 普門學報社, 2008)

- (2) 李世偉主編『台灣宗教閱覧』博揚文化事業有限公司, 2003, pp. 23-27.

印順法師については、恒毓『印順法師的悲哀』仏教正学同修会, 2006

この書では、現代禅の李元松老師と印順法師との質疑応答の中で人間仏教が紹介される。仏法理解に偏斜があるのではないかと質す老師に、「仏法の究極の理想は解脱である」と答える印順法師の仏法觀念が示される。印順法師は阿含經典に説かれる教えを仏法とし、以降の般若經典、方広系や唯識諸經は純正の仏法ではないという理解に立ち、「仏教本来は在人間的、仏と弟子、經常的「遊化人間」。就是住在山林，為了乞食，每天都要進入村落城邑，与人相接触而隨緣弘化。修菩薩行的，應該作利益人類的事業，傳播法音，在不離世事，不離衆生的原則下，淨化自己，覺悟自己。」(pp. 113-114), 「人間仏教的人菩薩行，以釈尊時代的仏法為本……仏法的究竟理想は解脱，而解脱心与利他的心行，是並不相礙。雖受時代的局限，不能充分表達仏的本懷」(p. 124) という主張が紹介される。

- (3) 餓口^{えんく}とは餓鬼のこと。

- (4) 武田 龍(依昱訳)「台湾佛教之光」(『普門學報』第44期, 普門學報社, 2008)

依昱法師によって中国語に翻訳されたものだが、その中では、筆者が理解不足のため「作務」と書いた箇所は、訳者によってすべて「工作」と訳されている。pp. 421, 425. このあたりの事情が窺える翻訳である。

参考文献

箕輪顕量「台湾の仏教」(『東洋学術研究』144, 東洋哲学研究所, 2000)

同 「台湾の現代仏教——拠点寺院の門派化とその存在形態——」(『パーリ学仏教文化学』20, 2006)

五十嵐真子『現代台湾宗教の諸相』, 人文書院, 2006

何 義麟「戦時下台湾のメディアにおける使用言語の問題」(『台湾の近代と日本』, 中京大学社会科学研究所, 2003)

殷 允芃編(丸山勝訳)『台湾の歴史』, 藤原書店, 2005